

国にいつてしまいます。版權は日本で確保したいのです。これが出版されると、中江藤樹理解ががらりと変わり、内容理解が一段と深くなると思います。

学術的に歴史的に非常に意味のあるものは、あまり売れないのです。そうすると出版社は二の足を踏んでしまいます。中江藤樹先生のもが本格的に出版されたのは、岩波書店から出た『藤樹先生全集』全五巻です。資料収集・校訂など非常に丁寧に行われ、よくあそこまで実現できたなあと感心します。西普一郎先生の人徳でしょう。高島に縁のあった皆さんが力を結集されました。時運も幸いました。藤樹先生に「日本の精神文化の象徴」を見出されました。この全集が今も根本資料として活用されています。

高島の皆さんにお願いしたいことがあります。その当時、岩波書店とやりとりしたときの資料が藤樹書院に残っております。原本資料、転写初稿、校正資料、それらを比較調査して、出版の経緯を解明していただきたいのです。

藤樹さんの思想を考える時に、一番魅力的なのは書簡です。例えば西普一郎先生は藤樹さんの『中庸』理解を註解しておられます。尤も抽象化された理論的なものです。それに

対して、書簡は生身のお弟子さんとのやりとりです。より良く生きるための心掛けとか、親切に（自らの事として切実に）、お互いに声を掛け合っています。小生の『日本近世の

心理学思想』（研文出版）の冒頭に「カウンセラーとしての中江藤樹」があります。カウンセラーというのは相談する相手の人と一つになって、その人が抱えている課題を自分も引き受けて、どう乗り切るかということとを相談して助言するというのがカウンセラーなのです。これはしんどい役割です。友達同士の話し合いでは埒の明かない、ぎりぎりの段階で、「やはり先生に相談してみよう」ということになります。大勢の人は手紙で相談します。藤樹さんは手紙で返事をしていきます。残されている藤樹さんの書簡の冒頭に質問の概要は記されています。ですから、当時の人の悩みや苦しみが非常に良く分かります。今の時代に通ずるテーマが非常に多いのです。藤樹さんの返事をもらった人はその内容を自分用に写し取って、元の書簡は友人に廻すのです。「良く生きる」上で肝心な助言が記されているわけですから、金言集なのです。同一内容の書簡が文体を少し変えて複数残っている所以です。「良く生きる」意味を藤樹さんに教えたのはおじいちゃん



です。「良く生きる」ための指針は今日でも大事な事です。それは単なる「知識」ではなく、「良く生きる」現場で活かされる智慧が肝要なのです。知識の人であった林羅山が「鸚鵡」と非難された所以です。

藤樹さんが生きた十七世紀は中国の学術情報が怒濤の如く入って来ました。しかし、教えてくれるお師匠さんがいない。漢文の読み方は少し習いましたが、内容理解は独学でした。何度も読み返して会得する努力を続けました。この努力には頭が下がる思いがします。

新しい知識が入って来たときに、それを消化して紹介する役割を果たす人物が欠かせません。林羅山はそ

の紹介者の役割を担った人でした。仮に学説医学だけだったら患者は死にます。患者をいかすのは具体的な診断と処方箋です。藤樹さんは国内戦争が無くなって「明日も生きられる」平和な時代に生まれました。「共に生きる」時代になったのです。さらに幸いしたことは、武士をやめたことです。武力で支配する役割をしなくともよい。「一市民」に立って、武士・農民と共に学んだのです。大洲から来た武士に対しても、戦い（殺し）の学びは一切していません。

石田梅岩の「心の学び」も「良く生きる」事が主題でした。石門心学に集まったのは町人・商人が主流でした。武士はいません。男女共学でした。「女に学問はいらぬ」と言われていた時代に、参加者の半分は女性でした。

高島には清水安三記念館があるとお聴きしました。清水さんは中江藤樹さんは隠れキリシタンだったという独自の考えを述べた人として知られています。一九三〇年代に北京に女子教育機関を設立したかたです。同じ時期にイプセンの「人形の家」が女性解放の戯曲として話題を攫いました。日本では小山内薫が築地小劇場で上演されました。そのころ仙台医学専門学校で学んだ魯迅は中国では時期尚早であると反対意見